

シュヴァイツァーにおける「生への畏敬」 の倫理と死生観の関係性

岩井 謙太郎

(和文要旨)

本論においては、シュヴァイツァー (Albert Schweitzer) の「生への畏敬 (Ehrfurcht vor dem Leben)」の倫理思想が、「生」のみならず、「死」の問題をも念頭において構築されたものであることを考察する。具体的には、1章では、遺稿『生への畏敬の世界観: 文化哲学第三部 (Die Weltanschauung der Ehrfurcht vor dem Leben; Kulturphilosophie III)』、『文化と倫理 (Kultur und Ethik)』を中心に、体系的認識論による倫理の構築の問題点を、シュヴァイツァーが論ずる、カントの認識論の諸問題を近代自然科学的思惟、インド的思惟との連関から検討する。そして、その際、彼の倫理の構築の重要な鍵概念である意志と認識の関係性について考察し、そこにおいて死の問題 (死生観の問題) が焦点になっていることを検討する。ただし、彼は前述の文化哲学等の著作においては死生観の問題を詳細に展開していないので、2章では、『説教 (Predigten)』における死生観に関する説教を検討し、生への畏敬の倫理と死の問題がどのように連関しているのかについて論じる。

(SUMMARY)

While Albert Schweitzer's philosophical foundation in vitalism is well known, this essay considers the role death played in the construction of his ethical thought, which is broadly known as an ethic of "Reverence for Life" (*Ehrfurcht vor dem Leben*). In particular, chapter one looks at the question of ethics formulation guided by systematic epistemology and, as argued by Schweitzer in his postmortem work *The World View of Reverence for Life (Die Weltanschauung der Ehrfurcht vor dem Leben; Kulturphilosophie III)* and in his *Culture and Ethics (Kultur und Ethik)*, from the comparative perspective of Indian philosophy and various issues of Kant's epistemology as understood by modern natural science. This effort requires clarification of

Schweitzer's key concepts of volition and consciousness and the roles they play in his construction of an ethical framework. This essay pays special attention to the question of death and its role in Schweitzer's ethical construct. However, in-depth analysis of death is absent from Schweitzer's treatise on cultural philosophy, and so attention will be given to Schweitzer's Sermons (*Predigten*) in which death figures more prominently. Utilizing the above works, this essay examines the connection between Schweitzer's ethic of "Reverence for Life" and the question of death.

はじめに

本稿においては、アルベルト・シュヴァイツァー (Albert Schweitzer) の「生への畏敬 (Ehrfurcht vor dem Leben)」の倫理思想が、「生」の問題のみならず、「死」の問題を念頭において構築されたものであることを考察する。シュヴァイツァーが生への畏敬において、「生」を重視していることは言うまでもないが、「生」の視点だけから、果たして内発的な生への畏敬の倫理へと接続しうるのかということが問題になると思われる。管見した限りにおいて、シュヴァイツァー研究の中心的思想ともいべき生への畏敬において、「死」の問題を取り扱っている先行研究は、野呂芳男が論じた「シュヴァイツァーの『生への畏敬』」論文である¹。野呂氏はその論文の中で、シュヴァイツァーの生への畏敬の倫理が死によって限界を有することを指摘しつつも、それを超越するために献身の倫理が存する旨の主張を、詩人リルケとの連関において示唆している。筆者も野呂氏の上述の考察に大いに影響を受けた。ただし、その詳細(論理的展開)については展開していないので、その点を解明するために、シュヴァイツァーの生への畏敬の哲学的思索における死の問題が、彼の説教(死生観の説教)とどのように連関しているのかについて明確化する。

具体的には、第1章では、遺稿『生への畏敬の世界観：文化哲学第三部 (*Die Weltanschauung der Ehrfurcht vor dem Leben; Kulturphilosophie III*)』、『文化と倫理 (*Kultur und Ethik*)』を中心に、認識論による倫理の構築の問題点を、シュヴァイツァーが論ずる、カントの認識論の諸問題を近代自然科学的思惟、インド的思惟との連関において検

¹ 野呂芳男「シュヴァイツァーの『生への畏敬』」、『基督教論集』第14号、青山学院大学基督教学会、1969年参照。野呂芳男、『実存論的神学と倫理』(第八章 死後の命)、創文社、1970年参照。

討する。そして、その際、彼の倫理の構築の重要な鍵概念である意志（生への意志）と認識の関係性について考察し、そこにおいて死の問題が焦点になっていることを確認する。ただし、彼は前述の文化哲学等の著作においては死生観の問題を詳細に論じていないので、第2章では、『説教 (*Predigten*)』から、死生観に関する説教を検討し、死生観の問題と生への畏敬の倫理がどのように連関しているのかについて検討する²。

1 倫理構築における認識論的諸問題

シュヴァイツァーが自身の「生への畏敬」の倫理を構築する際の大きな特徴は、私たちの生の意味を問題にする点に存する。その際、彼が批判するのは、認識論に基づいて私たちの生の意味を考察する立場である。何故、シュヴァイツァーはそうのように主張するのであろうか。彼は遺稿において、近代ヨーロッパ哲学の認識論（主観－客観図式）が孕む問題から、その点について考察している。というのも、素朴な主観－客観図式を前提とする限り、客観は主観を通じた客観でしかありえず、客観それ自体には到達しえないからである。シュヴァイツァーは生の意味の問題を倫理の問題と連関して考えているのであるが、この事態を倫理的問題に敷衍して考えてみるならば、すなわち、客観的な世界を客観的な倫理的世界と等値するならば、主体は、この世界に客観的な倫理的合目的性を見出すことができないと言えよう。シュヴァイツァーは、知覚世界における主観と客観の一致の問題が倫理的世界の客観性の問題と連関していることを洞察しているのであるが、この問題を克服するために、カントが独自の認識論を提唱したことを彼は指摘するのである。シュヴァイツァーによれば、カントは「物自体とその時間的空間

² 本拙論においては、以下の文献を用いるが、引用の際にはカッコ内の略号を記す。邦語の翻訳があるものについては適宜参照したが、引用においてはドイツ語文献を和訳した。

Albert Schweitzer, *Die Weltanschauung der Ehrfurcht von dem Leben, kulturphilosophie III*, Erster und zweiter Teil. C.H.Becksche Verlagsbuchhandlung, München, 2000 【WEL 1】

Albert Schweitzer, *Die Weltanschauung der Ehrfurcht von dem Leben, kulturphilosophie III, Dritter und vierter Teil*. C.H.Becksche Verlagsbuchhandlung, München, 2000 【WEL 2】

Albert Schweitzer, *Kultur und Ethik*, München, 1923. Verlag C.H.Beck, München, 10 Aufgabe, 1953 (白水社シュヴァイツァー著作集第7巻) 【KE】

Albert Schweitzer, *Predigten 1898-1948*, hrsg. v. Richard Brüllman u. Erich Grässer, München (C.H.Beck), 2001 (白水社シュヴァイツァー著作集第20巻) 【PD】

Albert Schweitzer, *Aus Meinem Leben und Denken*, Gesammelte Werke in Fünf Banden, Band 1. Verlag C.H.Beck, München, 1974 (白水社シュヴァイツァー著作集第2巻) 【LD】

Albert Schweitzer, *Verfall und Wiederaufbau* Gesammelte Werke in Fünf Banden, Band 2. Verlag C.H.Beck, München, 1974 (白水社シュヴァイツァー著作集第6巻) 【VW】

的な諸現象を区別する」³ ことによって客観的な倫理的世界の現存を保持しようとしたとされる。つまり、現象の世界（感覚的世界）は因果律に支配された世界であり、そこには自由は存しない。自由が存しない世界では現実には有意義な倫理的世界は存し得ないと言えよう。その問題を解決するために、現象の世界とは異なった物自体の世界（非物質的存在）において、人間が自由であることを要請したとされる。しかし、シュヴァイツァーはカントが認識論に基づいて倫理的世界を要請することを批判する。というのも、前者から後者が導かれうるならば、すなわち、前者の問題（認識論の問題）に疑問が呈せられるならば、それに拠って立つ、客観的な倫理的世界を構築することができなくなるからである。確かに、シュヴァイツァーもカントが主張する「感覚によって知覚された物質的実在」と、倫理を確保するための「精神的実在としての自身の自我」を区別することを一応承認している⁴。しかし、カントの認識論からは物質の実在も精神的実在（自我）も証明されえないのである。すなわち、カントにおいては、物自体を仮定しなければ私たちの知覚的認識に客観性を保持することはできないが、さりとて物自体とは何かを具体的に言明することはできないのである。カントの思想に内在的な立場から認識論を考察するならば、そこに論理的整合性が存すると思われうるが、一度、カントを離れて認識論的問題を考えるならば、シュヴァイツァーの主張も正当であると思われる。その点について、カント研究者である新田氏も、カントの意志概念（認識論）が孕む問題性について以下のように指摘している。

「カントは、確かに自然界の出来事は厳密に諸法則に従って必然的に生起するものであるが、しかし、現象と物自体を分離することによって、ものごとを絶対的に自ら始める能力としての自由（超越論的自由）を想定することもまた可能であることを示したのである。・・・ところで、このような解決は、自由を『考えることができる』ということを実証したにすぎず、われわれの意志が現実には自由「である」ことまでをも証明するものではない。もし、われわれの行為が、ヒュームの想定するように、つねに欲求や傾向性に従ってのみ引き起こされるのだとすれば、行為を自ら始める能力としての自由意志は、依然として『空虚な思惟』の産物にすぎないことになるだろう」⁵。

³ 【WEL 1】 S.330.

⁴ 【WEL 2】 S.38.

⁵ 新田孝彦「倫理学の視座」、世界思想社、2000年、206-207頁。

このように、新田氏はカント倫理学が孕む問題性を考察しているが、シュヴァイツァーも認識論の孕む問題性について以下のように指摘している。

「認識論的基本的問題は、私たちにとって、私たちにおける感覚的経験に基づいて生じる表象として与えられている」⁶。

「この表象は、総じて、私たちの意識の外部の現実と対応しているかどうかを疑うことさえ可能である。いかなる仕方においても、私たちの諸感覚が必然的に何らかの实在によって引き起こされねばならないということは断じて証明されないのである」⁷。

このように彼は私たちの外的知覚（物質の实在）が現実と真に対応しているのかについて疑う権利を承認するのであるが、ここで注意しなければならないことは、シュヴァイツァーが外的知覚を疑問視する理由は、彼が懐疑のための懐疑を行っているのではなく、インド的思惟の認識論（シュヴァイツァーが解釈する限りにおける）において、实在についての否定説が有力であったからである。シュヴァイツァーによれば⁸、インド的思惟は、实在についての否定説から、現実の倫理的世界の構築に対して極めて懐疑的に見ていたとされる。近代ヨーロッパの哲学的思惟において、有意味な倫理的世界を構築しうる認識の客観説を提示することができないために、カントの認識論が登場したとされるが、インド的思惟の非实在論（認識論）を直視するならば、カント的な認識論に依拠した倫理的世界の構築にも疑問が呈せられるのである。すなわち、カントの認識論においても物質的实在の認識の問題が解決したとは言いがたいのである。

「私たちは物質と称するものも、私たちにとって何か謎であることに留まっている。私たちは、それが、時間と空間の中に与えられたもの、諸力による現象であることだけを知っている」⁹。

このように、シュヴァイツァーは、物質的实在についての説得力のある客観的認識を主張し得ないことから、そこに依拠した倫理的世界の構築（物自体としての精神的实在としての自我）をも無効化するのである¹⁰。

また、このようなシュヴァイツァーの主張の背景には、近代の自然科学的思惟による研究成果へのある種の信頼が存するのである。つまり、自然科学的思惟による実証的な

⁶ 【WEL 2】 S.37.

⁷ 【WEL 2】 S.37.

⁸ 【WEL 2】 S.37-38.

⁹ 【WEL 2】 S.38.

¹⁰ その点について彼は以下のように主張する。「私たちは、非物質的世界と物質的世界を区別することはできないのである」。【WEL 1】 S.300-331.

考察からは、地球上の人間が依拠しうる宇宙の目的を無条件に肯定することはできないことをシュヴァイツァーは承認するのである。換言するならば、地球が宇宙（世界）の中心であること、地球においては人間が中心であることが、天文学等の研究の展開によって積極的に主張しえなくなったことを彼は認めるのである。自然科学的思惟を前提にするならば、人間は、世界の出来事（宇宙の出来事）の全体的意味を認識論から発見しえないと言えよう¹¹。

「私たちの地球は、世界の無限の大きさにおける無限に小さなものである」¹²。

それでは、私たちは自らの生の意味（世界の意味）をどのように考察すればよいのであろうか。シュヴァイツァーは、私たちの生の意味を、先述した認識論からではなく、自らの生への意志を拠点に考察することを要求する。

「倫理は認識論から何物も期待できないことは承認済みとみなしてよい。感覚世界の実在性を貶めることは、倫理に単にみせかけの利益しかもたらさない」¹³。

「感覚世界の全体が、諸力による現象、すなわち、神秘的な多彩な生への意志による現象であることを知ることで倫理は満足する」¹⁴。

彼によれば、物質的実在も、物自体としての精神的実在としての自我も、究極的には謎（神秘）であり、認識論からはそれらを確証しえないと考え、生への意志（欲望的視点）と、その反省的思惟（思惟）の役割を重要視するのである¹⁵。

¹¹ この点について、補足説明するならば、私たちが世界の出来事から全般的に認識できることは、世界（自然）は創造的であると同時に破壊的であること、すなわち「無意味なことにおける意味あること」【WEL 1】S.313 であるとしか言い得ないのである。すなわち、世界は、生命を誕生させる点においては創造的であるが、生命を死に至らせる点においては破壊的であり、このような視点に立つならば、世界には、人間を導くに至るような合目的性は存しないと言えよう。シュヴァイツァーはその点を以下のように説明している。シュヴァイツァーは、それについて遺稿で三点指摘している。「私たちは、人間と人類をいかなる仕方においても全存在の中心に据えることはできない」、「私たちは、総じて、世界と世界の出来事の中に全存在の最終完成へと導く全体の目的を発見することはできない」、「私たちは、そこに私たちが倫理的なものとして感じるものを全く認めることはできない」。【WEL 1】S.316。

¹² 【WEL 2】S.40。

¹³ 【KE】S.208。

¹⁴ 【KE】S.208。

¹⁵ シュヴァイツァーは、諸力（宇宙的な生への意志）と現象（個別的な生への意志）を区別する。彼は、認識論的には諸力とその現象を区別する立場を一応承認するが、両者の関係性については説明を断念する。ただし、倫理においては、諸力と現象が連関しているとされる。その点について彼は以下のように指摘する。「倫理は現象と諸力を、現象への作用が、現象の根底に存する諸力へも影響を及ぼすという相互連関を前提する限りにおいて唯物論的である。そのような現象を通じて行われる、生への意志の生への意志に対する作用がなければ、倫理は自らの対象を喪失したと思う」。【KE】S.209。

「思惟が目覚めると、それまで自明であったことを問題にするような問いが生ずるのである。どのような意味を君の生に与えるのか？この世界の中で君は何を欲するのか？これによって認識と意志との対決が始まるのである」¹⁶。

ここで注意しなければならないことは、シュヴァイツァーは、思惟を広義の理性と捉えるが、思惟を、数学的思惟等のような合理的な推論能力にのみ限定しているのではないことである¹⁷。

とりわけ、シュヴァイツァーは思惟における倫理の役割を評価するのである。

「真に根本的なものは、倫理的問題に心が占められている思惟のみである」¹⁸。

それでは認識と意志との対決とはいかなるものであろうか。まず、認識について簡単に説明しよう。認識とは世界の存在の仕方についての現状分析のことである。それに対して、意志とは、現状分析（認識）をふまえた上で、それに対する態度決定の事柄である。近代ヨーロッパの思惟の主要な特徴は、世界全体のプロセスに秩序ある合目的性が存するとの現状分析（認識）であった。しかし、このような現状分析（認識）は、意志自らが願望した投影の所産であり、的確な現状分析とはいいがたい。つまり、認識が意志の願望に対して奉仕する体裁になっていると言えよう（意志と認識の対決とは言えない）。シュヴァイツァーによれば、意志は自らの願望を交えずに、ありのままの現状分析を看取しなければならないとされる。ありのままの私たちの現状分析においては、彼が以下に言うように、世界全体のプロセスの認識においても、私たちの生への意志のありのままの認識においても、素朴な意志の願望の投影を許すべくもないのである。

「生は無数の期待を持って私たちを呼び寄せるが、ほぼ何も満たされない」¹⁹。

「私よりも前に活動した人は何を達成したのか。彼らが得ようと努力したものは、無限の世界の出来事においていかなる意味を有しているのか」²⁰。

¹⁶ 【KE】 S.197.

¹⁷ 【WEL 2】 S.27.シュヴァイツァーは『文化の頽廃と再建』において以下のように述べている。「理性は、私たちの心的生の多彩な動きを封じてしまうような、無味乾燥な悟性ではなく、私たちの精神のあらゆる機能が生き生きと共に作用しあっている総体である。理性においては、私たちの認識と私たちの意志とが、私たちの精神的本質を規定する神秘的な対話を相互に交わしている」。【VW】 S.81.また、シュヴァイツァーは、意志と認識を媒介する神秘主義について以下のように指摘している。「私たちにおいて、神秘的な仕方で相互に結びついている認識と意志は、理性において相互に理解しあおうとする。私たちが求める究極的な知は生についての知である。私たちの認識は、生を外的に見るが、私たちの意志は生を内的に見る。生が究極的な認識の対象であるので、究極的な知は必然的に生の思惟的体験となる」。【VW】 S.83.

¹⁸ 【WEL 1】 S.317.

¹⁹ 【KE】 S.197.

このように、ありのままの世界の現状分析（認識）は単なる客観的な世界の現状認識に留まらず、自らの生への意志のあり方（意志）と分かちがたく結びついた世界の現状分析と相関しているのであるが、シュヴァイツァーは、私たちがありのままの生の意志の現状分析を遂行するならば、世界の無目的性（生の無意味生）を帰結するような認識が生じうることを指摘するのである²¹。

「生への意志が思惟しはじめるときに、生への意志が突き当たる認識は、徹頭徹尾、悲観論的である」²²。

この現状分析をふまえ、インド的思惟においては、「人間に生存から何も期待しない」ような、生への意志（欲望）を滅却することに力点を置く態度が生じたとされる。

「およそ思惟する人間はこのような思想（死の思想）に近づく。私たちは相互に予感しているよりも深くこの思想に組み込まれている。というのも、私たちはみな現存在の謎に悩まされているからである」²³。

シュヴァイツァーのインド的思惟の解釈について、シュヴァイツァーの『インドの思想家の世界観』の翻訳者である中村元氏は、彼のインド的思惟の理解が原典に基づいて書かれたものではなく、シュヴァイツァーのインド的思惟の解釈には妥当性を有さない点があることを指摘している。碩学の見解であるので、シュヴァイツァーのインド的思惟の解釈の問題性については謙虚に傾聴しなければならないと言えよう。ただし、中村氏はシュヴァイツァーのインド的思惟の解釈すべてについて批判しているわけではないことも付け加えておきたい²⁴。

論者は、中村氏の見解と同様に、シュヴァイツァーのインド的思惟の分析を、実証的な文献学的・歴史学的分析として見るのではなく、あくまでも、彼が「生への畏敬」の倫理を構築するための理念的類型としてインド的思惟を分析していると考えたい²⁵。

²⁰ 【KE】 S.198.

²¹ シュヴァイツァーは、その事態について以下の点からも考察している。私たちが営む世界においては「『生への意志』の自己分裂の劇の恐ろしい光景」【KE】 S.232 を呈しているからである。すなわち、ある生命体は他の生命体を犠牲にして生存しているというありのままの現実を自らの生への意志が見出す点に、シュヴァイツァーは、世界全体のプロセスに対する客観的な合目的性への素朴な信頼の崩壊—それと連関した生への意志の自己否定—の要因を見ているのである。

²² 【KE】 S.198.

²³ 【KE】 S.198.

²⁴ シュヴァイツァー著作集第9巻『インド思想家の世界観』、白水社、1957年、313-316頁参照。

²⁵ 上掲書（316頁）において中村氏は以下のように指摘している。「全編を通じて特に光を放つ

すなわち、近代ヨーロッパにおいては、世界（人間）について楽観論的認識が有力で、インドにおいては悲観論的認識が有力であるとシュヴァイツァーは典型的に解釈していると思われる。その意味において、現実の歴史的な近代ヨーロッパ的思惟やインド的思惟においては楽観論的認識と悲観論的認識が共に含まれており、二つの見方は錯綜しており、その力点の置き方に違いが存すると思われる。

その点をふまえて、典型的な近代ヨーロッパ的思惟とインド的思惟の関係について簡単に見ておこう。シュヴァイツァーは、近代のヨーロッパ的思惟においては「生への意志と悲観論的認識の対決」²⁶ がなされていないことを批判する。というのも、インド的思惟において有力な悲観論的認識を真に自覚化するならば、社会改革による進歩意志の原動力を挫くことになるからである。しかし、シュヴァイツァーによる（19世紀後半の）近代ヨーロッパの現状分析によるならば、そこにおいては、楽観論的認識の根底に無自覚的な悲観論的認識が侵食しているとされる。ただし、ここでの悲観論的認識は、典型的なインド的思惟のように、エゴイズム的な生への意志を滅却する態度（自己への執着から解放を目指すともいうべき）への傾向を有せず、むしろ、近代ヨーロッパ的思惟においては、楽観論と悲観論とが混交することで、生きる目的を喪失し、エゴイズム的に欲望を追究するような態度が有力になるとされるのである²⁷。

もう少しこの事態を具体的に述べてみよう。悲観論的認識とは、生への意志をありのままに直視することで、自己の生への意志においてエゴイズムの要素が強く認識されることである。それを克服するために、典型的なインド的思惟に見られうるような、自己への執着から解放されること（内的要素）を強く願う態度が生じるとされる（社会改革に関心を持たない態度）。それに対して、楽観論的認識とは、自己の生への意志におけるエゴイズムの要素にはあまり目を向けず、社会改革によって人間（他者）が孕む問題を解決しようとの認識である（外的要素）。ただし、近代ヨーロッパ的思惟においては、このような素朴な楽観論的認識の深層に悲観論的認識が侵食しているので、挫折し

ているのは、西洋の思想家の名を挙げて世界思想史、あるいは東西比較哲学の立場から述べられている部分である。この部分は独自の意義をもつものとして今後重要な影響及ぼすことであろう」。

²⁶ 【KE】 S.199.

²⁷ その点についてシュヴァイツァーは以下のように指摘する。「彼はできるだけ多くの幸福を掠め取ることを追求し、何らかの活動をしようとすることによって、彼がそれによって本来的に何を欲しているのかを真に理解することなく、生を過ごすような無思慮な生への意志が生じるのである」。【KE】 S.199.

た社会改良（挫折した他者への献身）の裏返しとも言うべき、素朴なエゴイズムの追究が顕著になると言っているのである。シュヴァイツァーはインド的思惟における、自己への執着からの内面的解放のみの立場にも、近代ヨーロッパ的思惟における素朴なエゴイズムの自己主張の肯定にも与しない。近代ヨーロッパ的思惟においては、死から目をそらすことによって、逆説的にも、死へと支配された素朴なエゴイズムの肯定につながると言えよう²⁸。シュヴァイツァーは、両者いずれにおいても有意味な現実の倫理を構築できないことを懸念するのである。

これまでの議論から、シュヴァイツァーが有意味な現実の倫理（生への畏敬の倫理）を構築するために、死の問題を射程に入れていることを理解しようと言えよう。ただし、彼は、『文化と倫理』等の文化哲学の著作においては積極的に死についての分析を遂行していない。そこで、死の問題（死生観の問題）に言及している『説教(*Predigten*)』について考察することで、死に対する態度が生への畏敬の倫理と連関していることを明らかにしたい²⁹。

²⁸ ここで指摘すべきことは、シュヴァイツァーは近代啓蒙主義的合理的世界観（18世紀的ヨーロッパ的思惟）を評価していることである。その点について以下のように指摘している。「合理主義（Rationalismus）は、18世紀末かつ19世紀初頭に片付いてしまった思想運動以上のものである。合理主義はあらゆる正常な精神的生の必然的な現象である」。【VW】S.81-82。

²⁹ シュヴァイツァーはシュトラスブルク講義において生命観との連関において死の問題（死生観の問題）について言及する。彼によれば、死を考察する際に、生物学的な死（細胞レベルにおける死）と、代替不可能な私たちの実存的な死の問題を区別しなければならないとされる。後者において死を克服しうることが、宗教にとって重要な問題であることを彼は指摘する。シュヴァイツァーは、キリスト教を典型的に歴史的宗教と規定し、死の問題を以下のように解決することを指摘する。「歴史的諸宗教にとって、死は信仰の問題である。歴史的諸宗教は、死を原罪から説明し、それは、死を私たちの存在の復活を仮定することによって克服することを試みる」。それに対して、インド的宗教を典型的に自然宗教と規定し、以下のように指摘する。「インド的宗教において、各々の存在者が憧れることは、現実の待ち焦がれた死である」。

【Albert Schweitzer, *Strassburger Vorlesungen*, S.699.】つまり、キリスト教においては、何らかの意味における個人の復活を信仰することで死を克服し、インド的宗教においては、いわゆる輪廻転生からの解脱の思惟によって死の問題を克服しうることが、シュヴァイツァーは指摘していると言えよう。ただし、彼は、最初から死の問題の考察には向かわない。死の問題とも連関した不幸の問題についてシュヴァイツァーは考察する。私たちは、死に至らないまでも、健康を害し病に至りうる、また、自己の生存基盤を脅かされるような見通しのきかない存在でもある。換言するならば、私たちはいつ不幸に見舞われるとも限らない存在であると言えよう。その点についてシュヴァイツァーは以下のように言う。「受動的に従わされることは、以下の点において示される、すなわち、私たちは、自己の生が死に至らないまでも、自然の出来事によって不意に襲われる点に示されるのである」。

【Albert Schweitzer, *Strassburger Vorlesungen*, S.699.】すなわち、シュヴァイツァーは、この論考において、私たちが生きることに、誰も避けることができない不幸の問題、そこから生じる生の無意味性を克服しうることが、宗教の大きな存在理由であり、信仰の要諦であることを考察しているのである。

2 死生観と倫理の関係性

死生観の問題に関する説教は、1907年11月17日に聖ニコライ教会でシュヴァイツァーが行ったものであるが、シュヴァイツァーは生の問題を考察する際に、常にそれと表裏一体である死の問題を考えなければならないことを以下のように強調する。

「生（Leben）の重要な問題は、あなたは死に対してどのような態度をとるのかということです。私たちが魅了し、心を惹き付けるものは、すべて限定された価値のみ有するのです。それは、一瞬のうちに、すぐさま、全く価値のないものになりうるのです」³⁰。

死とはいかなるものであろうか。死と一口で言っても、生物学的な死、精神的意味での死等、様々なレベルで論じるべきことが存することは言うまでもないことである。しかし、私たちの死について常識的に考えるならば、死は誰にでも必ず訪れる出来事であるにも関わらず（普遍的な確実性）、それが何時生じるかを正確に予測することはできない（普遍的な可能性）。さらに困難なことに、私たちの死において、私たちが思い浮かべる死とは、あくまで生の視点から想像された死であり、生きているときに死そのものを体験することはできないと思われる。理論的には死そのものの体験（私たちの死の体験）が不可能なことが明らかであるので、わからないことはわからないと毅然とした態度をとってもいいはずである。しかし、それにも関わらず、死に対して不安と戦慄から逃れるすべを持っていない。そのためか、そのような不安から逃れるために、死から目をそらして生きているのが私たちの多くの現実であると思われる。このような私たちの現実をシュヴァイツァーはふまえ、現代人（近代人）の死生観について以下のように彼は言う。

「（生の）終わりの可能性を考慮しないという喜劇を最後まで演じています」³¹。

「死は無言の不安において、私たちの時代の人間を支配しています。そして、この不安が、私たちにどれほど身についてしまったとなっているのかについて・・・私と共に、この瞬間に当惑しておられることでしょう」³²。

もちろん、シュヴァイツァーも以下のように私たちが常に死を考えることを要求するわけではない。

³⁰ 【PD】 S.860.

³¹ 【PD】 S.860.

³² 【PD】 S.862.

「私たちは、毎日、毎時間、死について思惟する必要はない」³³。

このように彼は現代人の死の恐怖について共感的に理解するのであるが、彼は自己の死を恐怖に慄くものという視点だけでは捉えない。むしろ、シュヴァイツァーは死が現存することによって私たちに安らぎが与えられることを洞察するのである。

「死をありのままに考察することにおいて、そこには何か安らぎのようなものが存するのです。もし、私たちの生にいかなる目的もなく、永続するとするならば、生はいかに恐ろしいものであるか、すでに、いつか考えたことがあるでしょうか」³⁴。

つまり、シュヴァイツァーは、もし死が存しないような無限の生を生きることが可能になった場合に、果たして、私たちは、そこにおいて生の意味を見出しうるのかと疑問を呈するのである。それでは、何故、彼はそのように考えるのであろうか。その点について、シュヴァイツァーは以下のように言う。

「私たちが、私たちの眼を未来に向ける限り、この現存在の願望かつ関心に巻き込まれ、それによって、自己や他者の妬み、憎しみ、罪責と結びついているものすべてが、常に贖われずに積もってゆくのである」³⁵。

つまり、私たちが生きることには執着・罪責（悪）と、それと表裏一体ともいえるべき他者を犠牲にすること（被造物に対する犠牲）が纏わりつき、それを完全に払拭することができないが、むしろ、死において、それらから解放されると言う点で、死は私たちの「敵ではなく救済」³⁶であることをシュヴァイツァーは指摘するのである。確かに、死の問題を自己の罪責や執着の問題として考察しないのであれば、死は素朴な自己の欲望の追究の不可能性による自己の苦悩以外の何ものでもなく、それによって可能な限りのエゴイズムの生が促されうる可能性が生じうると言えよう。しかし、死をシュヴァイツァーの指摘に鑑みるならば、執着・罪責に絡みとられて日々を過ごす多くの私たちにとって、死はある種の救済であるかもしれない。しかし、そうであるならば、私たちが生きていることは許しがたいことであって、むしろ、できうる限りの禁欲的な生こそが私たちの救済であると言えるのではないかという疑念も生じるであろう。しかし、彼はそのような視座に与しない。むしろ私たちが「死の思想」について親しむことによって、罪責、執着に絡みとられた死すべき存在である私たちが、逆説的にも、生きることを許

³³ 【PD】 S.863.

³⁴ 【PD】 S.863.

³⁵ 【PD】 S.863.

³⁶ 【PD】 S.863.

されていること（自己の生の受動的肯定）を感得することに主眼目が存することを説くのである。

「この死の思想から、真の生への愛が生じる。もし、私たちが思惟において死と和解するならば、私たちは毎週、毎日を贈り物(Geschenk)として受け入れる。私たちが、生を少しずつ贈られうることで初めて、生はかけがえのないものになるのである」³⁷。

「死を克服することはどこに存するのであろうか。私たちは、・・・私たちの生と、その生に属している人々を死へと委ねなければならなかったのであるが、一時的に死から取り戻すかのようにみなし評価することである」³⁸。

このように、本来は死すべき存在である私たちではあるものの、逆説的にも、私たちを超越した何ものかによって、私たちに生が贈与されたことを感得し、生への愛（生への畏敬）すなわち、生のかげがえのなさを実感することができることとされるのである。その点について『私の生涯と思惟』においてシュヴァイツァーは「生への畏敬」との連関で以下のように言う。

「人間が自己の存在を単に何か与えられたものとして受容せず、むしろ自己存在を計り知れぬほど深く神秘に満ちたものとして体験することにある」³⁹。

シュヴァイツァーは、このような自己の生への畏敬の受動的体験を起点に、自己以外の他者、動物、植物への配慮、否、生態系全体をも配慮しうる倫理が生じうることを考察するのである。

「思惟するようになった人間は、すべての生への意志に対して、自己の生への意志に対するのと同様に、生への畏敬を示すような、やむにやまれぬ要求を体験するのである」⁴⁰。

³⁷ 【PD】 S.863.

³⁸ 【PD】 S.865.

³⁹ 【LD】 S.170. シュヴァイツァーは自己の生への畏敬の体験と相関的に他の生への畏敬が生じうることを以下のように指摘している。「生の肯定とは、漫然と生きることをやめ、生を真の価値へともたすために、畏敬をもって、自己の生に献身する精神的行為である。生の肯定は、生への意志を深め、内面化し、高めることである。思惟するようになった人間は、すべての他の生への意志に、自己の生への意志に対するのと同じの生への畏敬を注ぐよう、やむにやまれぬ要求を体験する。彼は、他の生を自己の生において体験する」。【LD】 S.170.

⁴⁰ 【LD】 S.171. また、シュヴァイツァーは同様の趣旨のことを以下のように指摘している。「人間は自己の生の神秘、自己と世界に満ちている生命との間の関係についての神秘について思惟するようになるならば、それに基づいて、自己自身の生と、自己の領域に登場する、すべての生に、生への畏敬を示し、これを、倫理的な世界肯定と生の肯定において活動する以外にはあり得ない」。【LD】 S.240.

そして、死の思想を通じて得られる生への畏敬の体験（自己が生きていることが許されていることの体験）は以下のように自死へと連なる悲観論的認識をも克服しうると言えよう⁴¹。

「生への意志は悲観論的認識よりも強力である。本能的な生への畏敬が私たちの内に存する。私たちは生への意志である」⁴²。

このような死に裏打ちされた生への畏敬の体験（生への愛）によって自己のエゴイズムの生から内面的に自由になることをシュヴァイツァーは説教において以下のように説く。

「死の思想に信頼することによってのみ、事象から真の内面的自由が生じるのである」⁴³。

つまり、死を直視することによって、自己の生のかげがえのなさを感じ得ると同時に、「私たちが担う名誉欲、獲得欲、支配欲」⁴⁴ 一辺倒のエゴイズム的な欲望の追究が永続性を持ち得ないことを感得させ、生に対する執着を相対化し、この世界の日常の出来事ともいふべき、弱肉強食的なエゴイズムの肯定の世界を批判的に見ることを可能にするのである。

「終わりを考える思惟によって、いかに、自己を、自らの内に存する悪しき自我から、また、出来事や人間から自由にし、人間恐怖や人間憎悪から自由にするという浄化がしだいに自己にもたらされているのかということを感じ得るのである」。⁴⁵

⁴¹ シュトラスブルク講義でも、以下のように、自己の生への畏敬に連なる指摘をシュヴァイツァーはしている。「自己の生を最も大いなる不思議であると思わないような人は、深く思惟的な人間ではない」【Albert Schweitzer, *Strassburger Vorlesungen*, S.701】。そして、このことと連関して、シュヴァイツァーが「死は最も大いなる謎である」【Albert Schweitzer, *Strassburger Vorlesungen*, S.698】と指摘するように、生の謎は死の謎とは表裏一体であると言えよう。このように、自己の生の神秘を感じ得ることは自己の死の謎に思いを潜めることに通じていると言いうるが、ここにシュヴァイツァーの生への畏敬の神秘主義の背後に死の問題が存することを確認することができるのである。

⁴² 【KE】 S.198. その点についてシュヴァイツァーは以下のように指摘している。「バラモン教の首尾一貫した悲観論的思惟でさえ、自死は人間が生の中の多くの部分を過ぎた後に行われるべきであるということ承認する。・・・仏陀は暴力的な現存在からの脱却を拒絶し、ただ、私たちが生への意志を滅却させることを要求する。それゆえ、悲観論はすべて首尾一貫していない。それは、与えられた現存在の事実譲歩する。悲観論に向けられたインド的思惟において、それは、周囲で演じられる出来事には全く無関与的にむきだしの生を生きる遂行不可能な虚構を保持するのである」。【KE】 S.198.

⁴³ 【PD】 S.863.

⁴⁴ 【PD】 S.863.

⁴⁵ 【PD】 S.863-864.

この「内面的自由」についての言及は、シュヴァイツァーの「生への畏敬」の倫理の重要な構成要素の一つである「諦念」の議論の具体的な内実であると思われる⁴⁶。彼はこの説教において顕には「諦念」という術語を用いていないが、『私の生涯と思惟』の以下の引用文から、説教における内面的自由についての言及と、哲学的な「諦念」の議論は重なっていると思われる。

「真の諦念は以下のことに存する。すなわち、世界の出来事に支配されている人間が自己の現存在の外観を形成する運命から内面的に自由になることに存する。それ故、内面的自由とは、あらゆる困難を克服し、それによって、深くなり内面的になり、浄化され、平穏な、心が安らぎに満ちるようになる力を見いだすことである。ゆえに、諦念とは自己自身の現存在を肯定することにほかならない。諦念を通りぬける人間だけが世界を肯定することができるのである」⁴⁷。

このように、生への畏敬の体験は、自己の死の考察に裏打ちされた「諦念」の思想と重なっていると言いうるが、自己の素朴な生き方も含めた世界の出来事（素朴なエゴイズムの肯定の事態）から内面的に自由になることによつてのみ世界肯定、すなわち、他の一切の被造物の肯定（人間は言うに及ばず、人間以外の生や環境に配慮する視点をもちうる）を行じ得ることをシュヴァイツァーは洞察するのである。これまで、シュヴァイツァーにおける死の克服の思想について考察したが、そこにおいての主眼目は主として自己の死の不安の克服の思想であった⁴⁸。しかし、自己の死の不安をたとえ克服しえたとしても、自己の死によって影響を与える他者の不安（苦悩）、他者の死によって影響を被る自己の不安については、各々の自己の不安を取り去ることができないことを彼は考察する。もちろん、シュヴァイツァーも示唆しているように、自己の死の不安の克服だけでも簡単になせる業ではないことは言うまでもないことであるが。とりわけ、彼は親しい他者（親子・夫婦等）の事例から、その問題を説くのである。ただし、シュ

⁴⁶ シュヴァイツァーは「諦念」について二重の議論を展開している。すなわち、世界の合目的性を思弁的に見いだすことの断念（認識論的断念）と、自己の生の意味を自らの生への意志から見いだすことの断念である。ここでの諦念は後者の意味で用いられていると思われる。

⁴⁷ 【LD】S.239-240.

⁴⁸ シュヴァイツァーは、ハイデガーについて以下のように指摘する。「ハイデガーは無常性の理念からどのように罪責の理念に到達するのであろうか」。【WEL 1】S.450。「ニーチェと同様に、ハイデガーにとっても世界は付属物である。彼らは他の生と内的関係を持ち得ない」。【WEL 1】S.450.

ヴァイツァーはこの問題を親しい他者の問題だけでなく、一切の他の生の問題として説いていることも注意を促しておきたい⁴⁹。

「私たちが、何らかの意味において私たちのために存在する人間を看取り、彼らが存在しなければ、私たちの生はどうなるであろうかと、戦慄を覚えて自ら問うときに、この不安が既に私を襲ってしまっているのです」⁵⁰。

このように、シュヴァイツァーは、自己の死の問題は、それだけで自己完結しえず、各々の自己にとっての他者の死の問題へとつながる射程を有することを指摘するのである⁵¹。他者の死の可能性に直面する際に生じる、自己の不安の感得は、生の畏敬の体験に基づく内面的自由を契機とした、ある種の他者への共感（共同体験）の発動であると考えられうるが、それは献身の倫理に至る必要条件に過ぎないのである。そこからシュヴァイツァーは以下のように説く。

「私たちは相互に私たちができることをすべて与えたであろうか。・・・このような憂慮（Sorge）が全面に登場して、私たちが、そのように相互に向かいあったときに離別に耐えうることを私たちは思念するのである」⁵²。

つまり、シュヴァイツァーは、他者の死に対する漠然とした不安、すなわち、他者への共感（共同体験）の顕在化を契機として、私たちの他者に対するエゴイズムの態度への反省的自覚が生じ（自己の罪責の自覚）、他者に対する外的な強制によらない自発的な献身の倫理が生じうることを指摘していると思われる。「生への畏敬」と罪責との関係の詳細についてはここでは論じることはできないが、ここでの引用文は、以下のように、哲学的に論じられた「生への畏敬」の体験に基づく献身の倫理の議論と重なりうると思われる。

⁴⁹ その点についてシュヴァイツァーは以下のように言う。「生において固く支えとなるものは、私たちが生から期待しかつ願望するものではなく、私たちが必要としている近くの他者と遠くの人間であるということが、事象の根源を究明しようとする努める人々が到達する認識であるのです」【PD】S.864.

⁵⁰ 【PD】S.864.

⁵¹ 自己の死と他者の死の関係性について、山川氏は以下のように指摘している。「一人一人の生が、自身のうちにまぎれもない『わたしの死』を蔵しつつ、しかもそれが、とりも直さず友愛に満ちた『われわれの生』を可能にするような、新たな生の次元が求められているのである。すなわち、『自己自身への配慮＝同胞への配慮』という等式の成立を可能とする『生活の技術』が問われているのである」。山川偉他編「人間—その生死の位相」、世界思想社、1988年、204頁参照。

⁵² 【PD】S.864.

「人間が、自己の生を自己のためにのみ生きず、自己の領域に登場してくるすべての生と一つであることを知ることである。他の生命の運命を自己において体験し、彼はできる限りの援助（助力）をもたらし、彼によって生の促進と救済を彼が関与しうる最も深い幸福であると感ずることにある」⁵³。

結びにかえて

これまで考察したことを纏めてみよう。第1章では、遺稿『生への畏敬の世界観：文化哲学第三部』、『文化と倫理』を中心に、認識論による倫理の構築の問題点を、シュヴァイツァーが論ずるカントの認識論の諸問題を、近代自然科学的思惟（19世紀半ば以降の近代ヨーロッパ的思惟）、インド的思惟との連関において検討し、そこにおいて死の問題が焦点になっていることを確認した。とりわけ、近代ヨーロッパ的思惟においては、楽観論的認識が優勢であったものの、悲観論的認識に侵食され（楽観論と悲観論の混交）、社会改良（他者献身）の挫折の裏返しともいえるべき、素朴なエゴイズムの追究が顕著に生じうるメカニズムを検討した。シュヴァイツァーはインド的思惟における、自己への執着からの禁欲的な内面的解放のみの立場にも、近代ヨーロッパ的思惟における素朴なエゴイズムの自己主張の肯定にも与しない。シュヴァイツァーは、両者いずれにおいても有意味な現実の倫理を構築できないことを懸念するのである。

第2章では第1章で展開されたシュヴァイツァーの死生観（人間観）の詳細な内実を検討するために、『説教（*Predigten*）』の中から、死生観に関する説教を考察した。シュヴァイツァーによれば、死の問題には、自己の死の問題と他者の死の問題が存し、両者は相互に連関しているとされる。まず、自己の死の克服の問題であるが、それは、自己の生の罪責・執着の問題であり、彼は死を罪責・執着からの解放とみなし、死を必ずしも悪しきものと考えない。むしろ、私たちが「死の思想」について親しむことによって、罪責、執着に絡みとられた死すべき存在である私たちが、逆説的にも、生きることを許されていることへの感得に至りうることを彼は説くのである。すなわち、私たちが、私たちを何らかの意味において超越した他者によって生を贈与されたことを感得し、生への愛（生への畏敬）、すなわち、自己の生のかげがえのなさを実感するに至るとされる。そして、この事態と連関して、自己の死の問題は、他者の死の問題へとつながる射程を有することをシュヴァイツァーは指摘する。他者の死の可能性に直面する際に生じる、

⁵³ 【LD】 S.240.

自己の不安の感得は、自己の生の畏敬の体験に基づいて生じうる内面的自由を契機とし、ある種の他者への共感（共同体験）の発動であると考えられうるが、それは自発的な献身の倫理に至るための必要条件に過ぎないのである。それが十分に発揮されるためには、他者への共感（共同体験）を契機として、私たちの他者に対するエゴイズムの態度への反省的自覚が生じ、そこを起点に自発的な他者献身が生じ、死を克服しうるとシュヴァイツァーは考察していると言えよう。つまり、①悲観論的認識を突き詰めることから生じる、贈与された自己の生の肯定（生への畏敬の神秘主義と関連した）の視点、②自己の生への執着を相対化しうる自己の内面的自由（諦念の立場と関連した）の視点によってシュヴァイツァーは死を克服しうると考えるのである。彼が論ずる類型的なインド的思惟においては②は存するが、②が①に立脚していないために、真の他者肯定・他者献身へと至る倫理を構築できないとされる。また、類型的な19世紀後半以降の近代ヨーロッパ的思惟においては、①の視点も②の視点も存しないと見えよう。シュヴァイツァーの死の克服の思想に即してみるならば、類型的なインド的思惟は自己の死の克服の段階で止まっており、類型的な近代ヨーロッパ的思惟においては自己の死の克服さえもままならない状態であると言えよう。その意味において、シュヴァイツァーは近代ヨーロッパ的思惟よりも、インド的思惟の方を高く評価していると思われる。ただし、シュヴァイツァー自身は有意味な倫理を構築するためには①に依拠した②が必要であると考えるのである。すなわち、①に立脚した②から、他者の死に対する不安（他者との共感・共同体験とも関連した）が生じ、他者に対する自己の罪責が反省的に自覚され、献身の倫理へと至ることを洞察していると言っているのである。

以上から、シュヴァイツァーの倫理は、「生」の視点だけから考察されたのではなく「死」の問題を念頭において構築された倫理であると主張しうると思われる。ただし、シュヴァイツァーが、生への畏敬の倫理における死の問題を『文化と倫理』等の哲学的著作において体系的に論じていないことに疑問を禁じ得ない。その理由は明らかではないが、先述したように、死には様々なレベルがあり得、死の問題には死後世界のリアリティーの問題も含まれ⁵⁴、哲学的に死後世界のリアリティーについて論じることは極めて困難なことであるので、この問題について、体系的に思惟することをシュヴァイツァーは断念したとも言えるのではないだろうか。また、本論では考察できなかったが、自

⁵⁴ その点については、野呂芳男「シュヴァイツァーの『生への畏敬』」、『基督教論集』第14号、青山学院大学基督教学会、1969年参照。

己の死の克服の思想は彼の主張する自己完成の倫理と重なり合い、他者の死の克服の思想は献身の倫理と連関していると思われる。シュヴァイツァーにおいては自己完成の倫理と献身の倫理は構造的に表裏一体の関係にあるので、両倫理とも単独では存し得ないのであるが、その点に即して鑑みるならば、シュヴァイツァーが倫理における死の問題を考える際に、自己の死の問題と他者の死の問題を相互に結びつけて検討していることを理解しうると言えるのである。それらについては指摘するにとどめ詳細については今後の検討課題としたい。

キーワード: シュヴァイツァー、「生への畏敬」の倫理、『説教 (*Predigten*)』

Keywords: Schweitzer, Schweitzer's ethic of "Reverence for Life", Schweitzer's Sermons